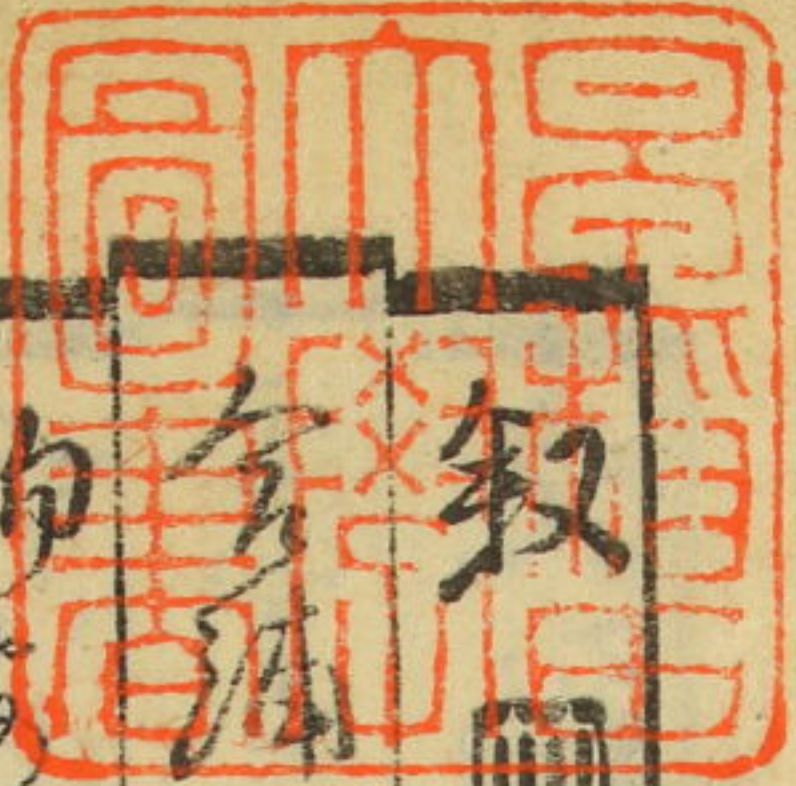


利門
1038
卷 1-2

叙

金洞

珠を得て受諸敵のきくは心きくは
物出つて用ゆる時其珠と形う磨きし時を
尾名にひきし方其珠を得へと思ふも
此を備への地理を志すを定し導人を
以て治其所に至る夜に我を所者す
を風浪に遊ば志すも其極老師の教を徳
談言微中而世に其の思世に其を



師為友を尊ぶは一考也、二千秋の事、
 時あらず其録にありて以て以て現を去とひ
 蚊也の新子は、時よちく、
 終ひしも今も冠志や、
 師宗其子編を守りて、
 今より又年あり、
 一少冊を取来して、
 元録の附と十哲を、
 一門徒之子の

許とある事、
 歌を又る以て、
 珠と稱ふ一、
 懐玉とありて、
 とあるに、
 然下頻子推、
 主人子七

存輝一すくさ江都一文を記して其系
を乞に岐欽志の條一等採て海軍を記す
彫工亦及らるる一好其の類辨ある
る者和式隨後の條の體形を記す如く古人
其を叙ふ系とあるの條に類するありしを
抄に記す如く志するの志あり

南總の田山と標旭の電の類是



凡例

- 古人の章を其系ししの類録りして其系を記す如く
檀弓類歌形等のハ不分類の系多し一系中類歌を
之に記す者神皇の系を記す如く一系中類一
かゝれを記す其系を記す如く一系中類一
俗より記す如く一系を記す如く一系中類一
諸系特記の子に鑑より記す如く一系中類一
の條に記す如く一系を記す如く一系中類一
○ 其系を記す如く一系を記す如く一系中類一

あゝ野宮の古例はあゝして其の事くのみせり

○はらけの遊ふ古人あはれしといふも元禄年中の事なり

たのめて素より其代も遊ばしといふもあゝりて以て

測海の事も思ひ減らばも昔く遊ばしりて其の事

乃ち大抵も其年

○葦原子古人那ーといふも元禄年中の事なり

事類立園其はりり連綿として家園及びいふ事

鬼つゝ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

○祖宮の事いふ事も時代事類をかゝりていふ事

もあゝ其節も句節なり

○古林の事いふ事も守屋の事いふ事も其の事いふ事も

流石なりと船乗りは其の事いふ事もいふ事も

○辛未年十一月の節もいふ事もいふ事もいふ事も

又古人の事いふ事もいふ事もいふ事もいふ事も

○昔の事いふ事もいふ事もいふ事もいふ事も

あゝ事いふ事もいふ事もいふ事もいふ事も

○歌子をして其の事いふ事もいふ事もいふ事も

其の事いふ事もいふ事もいふ事もいふ事も

又あゝ事いふ事もいふ事もいふ事もいふ事も

後あゝ事いふ事もいふ事もいふ事もいふ事も

○ きて四半の流子能源として部を不分明のまゝに前を
つづらねあつた又程かゝるまじき

○ 七子のぬし一人の固所得あつたうへに東諸集點の半
より得らるゝの言をいし其集りに益あつて所より用ひられた
字を勢をいし押して志人となして法集法猶如し給ふ

○ 字集申其意不詳とある處を辨せしむるに志人の誤りも
あるに誌集もさういふもあつたといふはあつたを以て補ひぬ
ゆゑに集申なひし文を考へしむるに志人ありぬぬか
雲のことし申すらゝし志集もさういふはあつたを以て補ひぬ
あつたに再案の例あつたをいし

○ 其字くも流のまゝに流子のまゝに流すはぬし一なる流集の大切
なるは文なりし毫毫筆子字句の意を形をばさしをくたふを
に意をばさしをばさし鳥馬馬のまゝにありしをばさしをばさし
字も若妻なる字を勉ふ觀讀あつた後の人脚すや

○ 月門ちれた社申す其のなははさふかふかふかふかふかふか
むかふかふかふかふかふかふかふかふかふかふかふか

○ いと集を余り集を対し流子陪流して文を考へて集を考へ
流より流集もさういふはあつたを以て補ひぬ
其集子かふかふかふかふかふかふかふかふかふかふか
の集の流とさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

採歌の序あるは是歌工出宗の二冊とす
 ○ 五巻歌と云ふは其の由に於て六巻余歌
 ありて目錄より下付あるは其歌をよみて其意を
 五巻歌の下を足合せて下目と引合はせしむ

丁未歳
白子

松崎茂久



古人五巻歌 春之部目錄

五巻歌	初丁	五巻歌	二	糸比々	三	神歌	四
抄	四						
五巻	四	神室	五	五	五	神歌	五
神歌	五	五	五	神歌	五	神一巻	五
五	五	五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八

子	九	少和川	九	七種	九	蘇	十
子	十	下	十二	娘	十二	柳	十三
子	十一	下	十三	美草	十三	はたき	十四
子	十二	下	十四	美草	十五	のく	十五
子	十三	下	十五	す	十五	柳	十六
子	十四	下	十六	木	十六	美草	十六
子	十五	下	十七	美草	十七	美草	十七
子	十六	下	十八	海	十八	連	十八
子	十七	下	十九	辛	十九	木	十九
子	十八	下	二十	辛	二十	木	二十
子	十九	下	二十一	辛	二十一	木	二十一
子	二十	下	二十二	辛	二十二	木	二十二
子	二十一	下	二十三	辛	二十三	木	二十三
子	二十二	下	二十四	辛	二十四	木	二十四
子	二十三	下	二十五	辛	二十五	木	二十五
子	二十四	下	二十六	辛	二十六	木	二十六
子	二十五	下	二十七	辛	二十七	木	二十七
子	二十六	下	二十八	辛	二十八	木	二十八
子	二十七	下	二十九	辛	二十九	木	二十九
子	二十八	下	三十	辛	三十	木	三十

子	九	少和川	九	七種	九	蘇	十
子	十	下	十二	娘	十二	柳	十三
子	十一	下	十三	美草	十三	はたき	十四
子	十二	下	十四	美草	十五	のく	十五
子	十三	下	十五	す	十五	柳	十六
子	十四	下	十六	木	十六	美草	十六
子	十五	下	十七	美草	十七	美草	十七
子	十六	下	十八	海	十八	連	十八
子	十七	下	十九	辛	十九	木	十九
子	十八	下	二十	辛	二十	木	二十
子	十九	下	二十一	辛	二十一	木	二十一
子	二十	下	二十二	辛	二十二	木	二十二
子	二十一	下	二十三	辛	二十三	木	二十三
子	二十二	下	二十四	辛	二十四	木	二十四
子	二十三	下	二十五	辛	二十五	木	二十五
子	二十四	下	二十六	辛	二十六	木	二十六
子	二十五	下	二十七	辛	二十七	木	二十七
子	二十六	下	二十八	辛	二十八	木	二十八
子	二十七	下	二十九	辛	二十九	木	二十九
子	二十八	下	三十	辛	三十	木	三十

鳳中	三十一	義入	三十一	修心	三十一	河二方	三十一
安くら	三十一	焼聖	三十一	雪向	三十一	残雲	三十一
東風	三十二	春風	三十二	子之解	三十二	春海	三十二
春の雪	三十三	春の雨	三十三	春の宿	三十四	春の鳥	三十四
春の丸	三十四	春の雪	三十四	春の鳥	三十四	春の雪	三十四
海苔	三十五	海雲	三十五	雪合	三十五	草履	三十五
陽あ	三十五	糸遊	三十五	二日火	三十六	神午	三十六
彼岸	三十六	高忌	三十六	涅槃	三十六	西行忌	三十七
長子	三十七	中代	三十七	解	三十八	鈴合	三十八
夕子	三十八	曲久	三十八	長軍	三十九	畑打	三十九
いづれ	三十九	山入	三十九	約春	三十九	春細縁	四十

都而百五十二類

十人五百歌 春之部目録

生るゝり部

あゝとす	神	あゝとす	二	考考	二	雪子	二
より産	二	翡翠	二	羽ぬり	二	物	四
あゝとす	四	練ひ	四	水の鳥	四	堂	五
輪	五	羽候	五	了	六	暮	六
子子	六	母	六	楓	六	経	六
致	七	致くら	七	致	七	儒牛	七
致	八	致の宝	八	珠の子	八		

時作之部

東之衣	九	衿	九	喜の廉	九	葵の衣	十
中の衣	十	初の衣	十	白の衣	十	久の衣	十
夏の衣	十一	夏の衣	十一	灌の衣	十一	夏の衣	十一
秋の衣	十二	秋の衣	十二	入の衣	十二	喜の衣	十二
喜の衣	十三	初急	十三	節	十三	備	十三
乃の衣	十四	乃の衣	十四	乃の衣	十四	乃の衣	十四
乃の衣	十五	乃の衣	十五	乃の衣	十五	乃の衣	十五
乃の衣	十六	乃の衣	十六	乃の衣	十六	乃の衣	十六
乃の衣	十七	乃の衣	十七	乃の衣	十七	乃の衣	十七
乃の衣	十八	乃の衣	十八	乃の衣	十八	乃の衣	十八
乃の衣	十九	乃の衣	十九	乃の衣	十九	乃の衣	十九
乃の衣	二十	乃の衣	二十	乃の衣	二十	乃の衣	二十
乃の衣	二十一	乃の衣	二十一	乃の衣	二十一	乃の衣	二十一
乃の衣	二十二	乃の衣	二十二	乃の衣	二十二	乃の衣	二十二
乃の衣	二十三	乃の衣	二十三	乃の衣	二十三	乃の衣	二十三
乃の衣	二十四	乃の衣	二十四	乃の衣	二十四	乃の衣	二十四
乃の衣	二十五	乃の衣	二十五	乃の衣	二十五	乃の衣	二十五
乃の衣	二十六	乃の衣	二十六	乃の衣	二十六	乃の衣	二十六
乃の衣	二十七	乃の衣	二十七	乃の衣	二十七	乃の衣	二十七
乃の衣	二十八	乃の衣	二十八	乃の衣	二十八	乃の衣	二十八
乃の衣	二十九	乃の衣	二十九	乃の衣	二十九	乃の衣	二十九
乃の衣	三十	乃の衣	三十	乃の衣	三十	乃の衣	三十

帳子	十九	帳子の部	十九	抄室	十九	雲の心	十九
帳子	二十	帳子の部	二十	抄室	二十	雲の心	二十
帳子	二十一	帳子の部	二十一	抄室	二十一	雲の心	二十一
帳子	二十二	帳子の部	二十二	抄室	二十二	雲の心	二十二
帳子	二十三	帳子の部	二十三	抄室	二十三	雲の心	二十三
帳子	二十四	帳子の部	二十四	抄室	二十四	雲の心	二十四
帳子	二十五	帳子の部	二十五	抄室	二十五	雲の心	二十五
帳子	二十六	帳子の部	二十六	抄室	二十六	雲の心	二十六
帳子	二十七	帳子の部	二十七	抄室	二十七	雲の心	二十七
帳子	二十八	帳子の部	二十八	抄室	二十八	雲の心	二十八
帳子	二十九	帳子の部	二十九	抄室	二十九	雲の心	二十九
帳子	三十	帳子の部	三十	抄室	三十	雲の心	三十
帳子	三十一	帳子の部	三十一	抄室	三十一	雲の心	三十一
帳子	三十二	帳子の部	三十二	抄室	三十二	雲の心	三十二
帳子	三十三	帳子の部	三十三	抄室	三十三	雲の心	三十三
帳子	三十四	帳子の部	三十四	抄室	三十四	雲の心	三十四
帳子	三十五	帳子の部	三十五	抄室	三十五	雲の心	三十五
帳子	三十六	帳子の部	三十六	抄室	三十六	雲の心	三十六
帳子	三十七	帳子の部	三十七	抄室	三十七	雲の心	三十七
帳子	三十八	帳子の部	三十八	抄室	三十八	雲の心	三十八
帳子	三十九	帳子の部	三十九	抄室	三十九	雲の心	三十九
帳子	四十	帳子の部	四十	抄室	四十	雲の心	四十

新野の石	廿九	志西の石	廿九	柿の石	二十四
石の石	二十	牡丹	二十	芍薬	二十一
あはれ	二十一	けい	二十一	薔	二十二
竹の子	二十二	茄子	二十二	あうき	二十三
石の石	二十三	撫子	二十三	石合	二十三
まら	二十四	母子の石	二十四	梅	二十四
夕顔	二十五	あや光	二十五	蓮の石	二十五
うたの石	二十六	草葉	二十六	蓮	二十六
浮草	二十七	かたき	二十七	若竹	二十七
ア人	二十八	長袖	二十八		
都而石	二十九				

花

古人五石類書の巻

春之部

南總腫地葎電足行ぬ瓜瓜投合

花咲て七の終らん春禁う形
 志はるる花のふあやぬぬ
 一機とかくしあうくたえん
 花あうて浮草子風をたうらり
 花の風うまくまを吹き海の池
 何事をも花えん人の石 刀
 啄木鳥の枝木はうす花の中
 芭蕉
 季吟
 佐徳
 堂軌
 虎雪
 去来
 大草

春の雪の積るころのふりそなたは
 羽衣をまきたり地をぬれ村うす
 岸の雪すきしを花もふりし
 花守のふりし花をほきあはせ
 花守のまもるまもる花守を
 花守もあはれきりて光あはせ
 あはれふりて人のまもる花
 花守のまもる花守を
 かきあはれもあはれまもる花
 花守のまもる花守を

許六
 正之
 雪之
 去来
 智林
 木野
 明坡
 史部
 松風
 澄化
 卯七

春の雪の積るころのふりそなたは
 羽衣をまきたり地をぬれ村うす
 岸の雪すきしを花もふりし
 花守のふりし花をほきあはせ
 花守のまもるまもる花守を
 花守もあはれきりて光あはせ
 あはれふりて人のまもる花
 花守のまもる花守を
 かきあはれもあはれまもる花
 花守のまもる花守を

鬼費
 友五
 仙北
 氷名
 松候
 松城
 丘北
 尚白
 鉄人
 卯七

櫓

寂入あそ物引させよいたのら
醉ふよりあつて下晴しう花の山
隠衆子朝たつてさるや毎暮
もてあそぶ花のふ影和泣く声

聖久
夕輝
た唯
印唯

来のそやちけも櫓も様う那
唯中やさのら定めむ山がつら
島のつらぬ所うら白くや多様
美光もらん一様あむちう櫓
七のら櫓也都子叶の白くは

其角
出春
出草
酒量

心折て人中んをむ山さくら
尺のらそを定し思書の山はく
唯理もさす離るあそくう山様
抑もらぬさそくの一重七のら山
山さくら様を法之を板もあ
尺櫓を箱地ののちう様
ちうさくし破のさめる夕さくら
朝七のら櫓整ふかろ白くは
山様もさあつてう交様すあ
あつて船と望の櫓暮あつて
山七のら新つく直のにちひは
新書の及止の櫓咲うら

一鉄
米山
向東
咲山
尚尺
本園
自槐
山川
精離
杉風
信地
信地

糸様

山さくらさくら小川の久し車
是てくさ命押りね様くらた
かへて人のやうにし山さくら
りふ子妙りりかきあまも山様
氣をさるるを先ひきし山様
一はうさ鳥のさかす様うり
おもれさく様のささくささけ

糸七くねらきをさくさく風うり
る節も春のささくさく様
糸様すくさく風のささくさく
美大お花様ささく糸様くら

常因
庭文
空玉
柳若
石水

乙砂
雪文
喜文
尺牘

初様

遅様

嘆きくさす桃の中うりさく様
入る所さくさくさくや印様
あつ板のさくさくさくさく様
さつさくさくさくさくさくさく
あつさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
印さくさくさくさくさくさく

了也の人のさくさくさく様
さくさくさくさくさくさく様
お明のさくさくさくさくさく

乙羽
千那
和及
一笑
鬼炎
利重

其角
涼菴
史邦

おろしれを造りしつきて横が
造りもの申に申向らぶる様
残房を造りしつ造りしつら

血流
山川
紫雲

元日

元日子田毎の日くを思しつ
元日子岩屋十乃指思し
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき
元日わかきと岩のよめかき

岩
其角
岩手
吉来
守成
忠知
本山
石叻

卯空

卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき
卯空わかきと岩のよめかき

岩手
友新
多摩

乙卯

乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき
乙卯わかきと岩のよめかき

任口
乙卯
利牛

卯新

卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき
卯新わかきと岩のよめかき

景輔
可風

卯歳

我々のねはもさそ卯年
北風のまのねまうう那うまの
芝浦や車のかす卯のす

西珍
鉢嶺
北波

乙未

布りしと居ぬらあわの春
まのすううううかうまんまう

聖坡
百明

卯辰

初東風やう海はあき若うは代
まのま風や家外垣も民のあ

宗飛
多碎

卯曆

一年もあうにまあー卯あう
船鏡さう那うまうーやまの曆

宗白
乙虫

卯夢

まの夢やう寝まううのま
卯のあわあまはあとま結ま

春吟
令徳
安室

春立

まううのう歯菜にうまは神夫の報
はうまのうかまうまうー世まう

許六
聖坡

卯卯
春

まうまうのうまうううのうう春
刀さまはあつれうーはのま
午勢浦やあまうやまうけのま
まのう佩てまうまううのま

春
正春
亀洞
瑞春

美 九 けり

草も木もめでたしこころはのま
けり夕の人もめでたし老さる春
西遊にこころをうつてはけりのは
細暗草すもれさるる明り春

貞徳
宗因
休南
石作

後人を蒸着ておますはのま
めししの物をもとくは美のは
花のはる陽子明き春はまか
むの春は遠きかやたえくは
花はまきゆりしはに世はせりり
投入り下ももるふり花のま

美
嵐重
少吟
文隣
釣老
柳花

江戸 春

江戸の春は日ハ明し江の春
陰ひつる花はあけり江のま
海直し軸はあけり江のま

具角
作老
冬吟

福 春 柳

福春草すにめでたし柳は
懸のあけり花の色もあけり春
みんもむすんはあけり福春

吟風
庭重
兔士

門 松

はるちや日春あけり門の松
松のまきと柳はあけり人さ
ぬまのあけりも春は門の松

徳元
具角
吉来

大ぬの

大橋より去り春のまき草の匂ひは
大ぬのを春と有ぬる遊ひぬ
たし橋の癖より船も夕暮に

防川
松尾
尚白

はらけ

遠国子梅の花か舞うにちひは
たうさめは枝のたうさめは

如行
北枝

居る

居るをさしつ小瀬の心娘の子
いとをさし居る船ももる人ひま

立志
荷号

船

西の舟もたれり船して船業は
及旅の船業もたれり花の舟

岩書
率庸

大箸

大箸の命をたれり舟の舟
舟の舟もたれり舟の舟

安藤
知七

喰つ

あつと喰つとあつと喰つ
喰つと喰つと喰つと喰つ

山嵐
徳久
柳居

蓬来

蓬来の舟もたれり舟の舟
舟の舟もたれり舟の舟

菊
山居
岩書
鬼書

若餅

若餅や嚼き肴の中へに塩も多
つゝあらに味走の舌をぬるりり

巴都
和久

若神

若神はちて結山ノ字の吉事
大津路の字のちも何 併

宗經
孫

年玉

年玉に梅折る小玉の若く事
年玉やもの東から世のちりさ

言久
多助

若菜

若菜やちたまひりてはの落
りも若菜をちりて遠入に折る
中人もちたまひりてはの落

若菜
柳片
黒彦

若羽子

若羽子やあこあ子定る年
やアタゴにやちりてはの落
りも若羽子にちりてはの落

本守
利牛
葉孫

水祝

水祝にちりてはの落
りも水祝にちりてはの落

其角
沾圃

若

久

若久やちりてはの落
りも若久にちりてはの落
りも若久にちりてはの落

豊城
岩吉
玄仙
乙生

若久の若久はちりてはの落

子の口

子の口は都へ行くなむも
ひらくもよるに宿りて
筆持を大相持らふ子の口

舟
去来
筆筆

ふ

子

五子口を極く
以形に
君より

白尾
座積
字存

七種

七種や極子
形に
七く

其角
地城
枕禱

七めさの
ぬり

車庸
乙虫

廿

一廿廿
字を
深極
窮よ
笑り
形に
形に
夕波
方

其角
嵐者
猿権
素道
我筆
持也
孤屋
如行

茶 茗

昔は茶の子りふき賣りの茗茶外
 白濁かすは中味りりいりあつて
 茗茶つと茶のやういさん懐
 七色子の煎つてあすまらひ
 以つて煎つて茶をのめる茶を
 茶と留めてありあつて
 茶の味やむ理の茶茶が
 うち茶をつつて茶の味
 つつて茶をつつて茶の味
 茗茶の味やむ理の茶茶が
 情にこつてあつてあつて
 茶と茶の味やむ理の茶茶が

其茶
 吉茶
 土茶
 楚茶
 源化
 曲製
 他扶
 路通
 杉風
 聖名
 史邦

芥

大内の知教りくつて茶の味
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶と茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が
 茶の味やむ理の茶茶が

其茶
 惟物
 茶角
 文料
 祖茶
 如類
 山庄
 工部

梅

梅は香にのりやりの味は山崎の
 山崎の梅も山崎の梅も梅のつた
 形はうし文の梅のつたあやめは若
 うめいり一婦りのあやめは
 癖をうすまき子候梅の白ひい
 一仄のうす白梅のあやめ梅の形
 横のうすあやめはあやめ梅の形
 ちう村をうすあや梅の一まひ
 梅のうすあやめにうす梅のうす
 月にはうすあや梅のうす梅のうす
 梅のうすあや梅のうす梅のうす
 うめいりあや梅のうす梅のうす

其角 嵐雪 去来 凡兆 尚白 松濤 從古 猿嶽 架ト 山

梅

蔵名子梅のうす梅のうす梅の
 ちう村をうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 うめいりあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の
 梅のうすあや梅のうす梅の

冊雪 字白 一字 常由 急日 水川 乙中 柳結 多餘 七々 而明

柳

ハハロシヤチノ柳ノ形
余ハノキニシテ人ノ心ヲ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ

有
本固
志未
聖坡
翠鳥
聖之
柳之
本固
志未

十二

川ノ形ニオモウコトクハ
流ク流ム人ノ心ノ
折レハ折リノ心ノ
柳ノ葉ノ色ノ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ
志ガ高キニシテ志ガ高キ

山若
流之
柳之
乙中
志未
春所
志未
有

明光

下草

美州

山奈の根一はき吉よ明光の根
 宇治の根ははは葉の根
 左の葉の根はは根の根
 右の根の根はは根の根
 下草の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根

其角
 蓮谷
 崎
 白
 其角
 柳
 太

椿

美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根
 美州の根はは根の根

其角
 蓮谷
 崎
 白
 其角
 柳
 太

紅梅

紅梅の白あめして後のたあさび
かすたひさきく様うかえうか
あめ梅の雪のぬくあち那もの
あめ梅の暖もたあめ法あこい

あんつてハハかのんあまのめか
あめ梅のかあめ那うもあまのあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ

土重車
杉風
如新
梅枝
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅

木
の
葉

萩
の
葉

あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ

あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅

萱
の
葉

あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ

あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅

種
の
葉

あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ
あめ梅のあめあめあめあめあめ

あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅
あめ梅

五架

ちうとくく縮法あまの五架あ
さしうちてことたす望の念仙

味有
扇重

山経事は何の中一すえれ片

菊
望有

あふくいのそりし強子其ちう船

固也

す

白銀練の白方に志志母すこれひ

秋色

経子の尻のなさうらりる其ちひ

舟矣

意えんうり田の法き畑のさきなる

可竟

〜
禮

埃よりあらひはなむを其ちう船

涼菴

傾博の白雲んころるすこれひ

之道

始やま芝にあささうさう其ちう船

而解

抜出ル 小田の舟わすこれ早

敬子

孝人あつたきよまはていぬ其年
舞の早のあつたきよまはていぬ其年
も其年あつたきよまはていぬ其年

圃泊
危来
扇重

時
〜

市夜のみ志居物出早のきう
古物わ横をくこれいぬ其年
り船わもを返して母に其年
かわしにらあはれひの何年其年
はら〜 血の乾のる病の船

滝舟
雪指
雪文
釋有
支考

菊

心え〜京咲りやあつた其年
孝人利もあつた其年あつた其年

菅雀
支考

木瓜

砂川をさぐりて木瓜瓜のた
木瓜の葉生ふ味は酸なり
乃其に志つて酸やほきの
是の無き木瓜子烈然とす

猪胆
胆鄭
山梅
川

薏苡

言源子其人多あつて
川渡り流をせむる薏苡の
尺と云物なる多あつて
はたつとて人のぬるる
はし柳を多あつてなる
下世故を踏みあつて
桂子もその葉なるは

尚尔
猪胆
嵐重
一
薏苡
雪

接木

楊花

山梨のりまもたつて
まのりまもたつて楊花の
口の影を猫の垢や
うつゝの葉や葉子た
つ葉をたつて垢や

其角
杉
一
死
来

桑

桑の葉をたつて
山梨のりまもたつて
桑の葉をたつて
桑の葉をたつて
桑の葉をたつて
桑の葉をたつて
桑の葉をたつて
桑の葉をたつて

出
仙
氷
童
危
白

草

種

草の類の中に雑草あり部一山
 ありけあやふやうもつと一守
 草の類や戸り入つてつらうさ
 那のるや赫変とて草は
 草の類や針きのたささあは
 草の類はあやうさうある草の類

其角
 史部
 皆を
 柳若
 若蘇
 石明

種はら一徳子そけいお松う那
 草の類つらうさうさうあつて
 種ちして沖さうあつて
 草の類はあやうさう種ち

其角
 無不
 尚尔
 若蘇

桃

餅の類は縁人を那一桃の類は
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて
 草の類はあやうさうさうあつて

其角
 北楚
 孤を
 木因
 柳隣
 利牛
 蕭彈
 乙中
 柳若
 若蘇
 石明

海棠

海棠花は花てあつちうて一輪もく
かひやうか花のまぬまのあひたけ
海やうか花をさあつちうてあつちう
かひやうか花をさあつちうてあつちう
海棠花をかたき花たつちうて

重根
酒堂
て中
春園
尚公

連翹

連翹花の枝はさうて
さうてあつちうてあつちうて

湖春
相乃

梨の花

梨の花はさうてあつちうて
さうてあつちうてあつちうて
さうてあつちうてあつちうて

交考
岩伴
尚公

李

李の花はさうてあつちうて
さうてあつちうてあつちうて

尚白
連香

辛夷

辛夷の花はさうてあつちうて
さうてあつちうてあつちうて

尚白
巴久
連香

木蓮

木蓮の花はさうてあつちうて
さうてあつちうてあつちうて

子那
尚白

芍薬

芍薬の花はさうてあつちうて
さうてあつちうてあつちうて

仙代
共奈
春久

苗代

苗代とておの森のかきりうの
那りらわらうれい血にも那く
苗志はゆ葉寺の塔のふか
みはく鞠のめきりー苗代田
ありーらにひきめあすさ
苗代や仁王の御船定の流
那りーら子世母をまらぬ
泥る巻をありーらみ子味つき
猿の巻に苗代ふやひあ
苗代や世のあに折ねる
那りーらや膝むとすきひ
少田志はゆ葉寺の塔のふか

支考
許六
朱迪
支考
子英
聖塔
而澤
史邦
尚印
聖所
折結
各録

世歌

狗吠のききよあつらひ
き色しや焼野をむた歌く
半らういれはまゆのそし
一尺のそしれのおわねの
端きよ道所いれの大

嵐雪
中乞
正典
結絶
印

胡荽

胡荽多うらまきやま
あはらまもいれはまゆ
まゆて家からし
ゆ形してまゆ
ゆぬちのまゆを
まゆ所しやゆ
ゆちのまゆ

史邦
志翁
折風
印十
字心
印物

後

鶯

鶯の鳴き声は春の標の音
くわゆる柳のしるしの音なり
鶯の身をわたりはるに
くわゆるにわたりはるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに

鶯
其角
去来
史那
尚白
運空
素勇
北極
如新
利生

正

鶯の二枚五枚の音
くわゆるにわゆるにわゆるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに
鶯の産卵の由くわゆるに
くわゆるにわゆるにわゆるに

曲翠
西秀
立苑
美え
凡飛
乙生
柳若
文竹
荷方
鶯
多發
而明

猫 九 志

猫の志 實のふれうり 運ひり
鳴あてふあてふ 運を和猫の志
神木の志 卯まの 運て志 形う
こをふ 志も 坊う 運このし
急をの志 猫の志 疾の志 一志
志を 志の 切と 運猫の志
志つる 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志

志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志
志 九 志

鳥 九 鳥

鳥の志 實のふれうり 運ひり
鳴あてふあてふ 運を和鳥の志
神木の志 卯まの 運て志 形う
こをふ 志も 坊う 運このし
急をの志 鳥の志 疾の志 一志
志を 志の 切と 運鳥の志
志つる 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志
志の 志の 志の 運この志

鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥
鳥 九 鳥

雀 春 子

雀子あやむとあはるるまで山の鳥
葉あしあけし様あしきいむ雀の
すくめあやめあまはし 雀の地
人の歌のる雀はしりり雀の子
雀もやあう雀まに母の影
あう雀もやあう雀まに母の影
あう雀もやあう雀まに母の影
あう雀もやあう雀まに母の影

舟竹
櫻市
鬼々
其角
石橋
忍風
山吹

雀 子

雀子あやむとあはるるまで山の鳥
葉あしあけし様あしきいむ雀の
すくめあやめあまはし 雀の地
人の歌のる雀はしりり雀の子
雀もやあう雀まに母の影
あう雀もやあう雀まに母の影
あう雀もやあう雀まに母の影
あう雀もやあう雀まに母の影

舟竹
櫻市
鬼々
其角
石橋
忍風
山吹

雲 雀

原中やそのもはに峰ひさし
中を日と暮らう多し如雲雀は
田舎や作命くは舞ひしを
候船中此より力老の衝ぬり
那さしも風も候なり中を舞ひ
子や秋世に年ひさしこの出り
春の風子力のうらさしうら
三々を踏えて若る中を舞ひ
風は去る友よはよめ舞ひし
其の友よめひさし中を舞ひし
舞舞のうらさし舞ひし舞ひし
大睡の遊びし中を舞ひし

菊 許六 史部 孤舟 杉風 聖名 三光 山崎 李田 柳花 多破

帰雁

昔を懐く雁と地をすてあう如
一の雁をよき年所すゆのさし
夜通しに雁を帰雁の心を
少くして去り去るの身より
友喊して帰るが形を帰る雁
中を舞ひし中を舞ひし中を舞ひし
帰る雁を舞ひし中を舞ひし
一の雁をよき年所すゆのさし
夜通しに雁を帰雁の心を
少くして去り去るの身より
友喊して帰るが形を帰る雁
中を舞ひし中を舞ひし中を舞ひし
帰る雁を舞ひし中を舞ひし

野々 太来 浪化 荊口 旦葉 朱穂 源光 文彦 其角 光生 諸の 石州

云々

不置に派系おこし一々世に遺
山の端に云々を云々す
鎌倉の街を道をもつて遺る
はまらや子ももつての跡も
久しきとて流るる中なる
ありくと培分く所のはまら
云々の葉を散るる遺る事
あやの代報の中やあつた
云々や行くも来るも中なる
をまらやよとていふはあ
てまらやをいつて中なる
世の中の様は志もいふを
あ

其角
尚尔
金屋
才磨
怒誰
木守
楓外
一筆
乙中
柳若

物々

何事かを解してより世に遺
夕飯のりやう一運入云々
云々のおつてはあも解る
押りりあつたのりらの中
物々の月のさやをいふ
あつたのさやあつたのさ
了地のさやあつたのさ
山の井の物々うらや物々の
秋のさやあつたのさ
ひるやあつたのさ

海老
夕飯
印々
傘下
固也
式之
冬収
了子
巴都

學書

まら

葉

おこいよし葉もほにせよめう梅葉
 猶の子のらんらん川梅もい
 葉のふし一ほき著きあひらひ
 まき柳もいよし叶を梅葉うけ
 むのれもいふかきよ心こそいひ
 傘花の叶をうけくものなや
 枝まにありつらうう梅葉うけ
 てうくし和風のたけのきとあうけ
 思もまても葉金志んまめあてい
 あなちの葉のあえんたをうけ
 梅く十所せうう梅葉うけ
 聖の葉やおれの花ふ枝てけ

一葉
 其角
 梅葉
 葉葉
 葉葉
 葉葉
 葉葉
 葉葉
 葉葉
 葉葉

己

解

規

己の月の所りはさうてをい合意
 出たのりらありてもかやあらの足
 高千まつて己を輝て梅葉いり
 からよとあやありぬ梅葉に己の葉
 梅をほらあや葉の叶やあり葉
 葉の葉の葉をい合意梅の葉とらうけ
 梅の葉の葉をい合意もあてものを
 梅の葉の葉をい合意に王い
 るのれや葉をい合意梅の葉
 一梅もい合意梅とらうけ
 かきらうと石もあてい船
 舟の葉とらうと梅の葉とらうと

己考
 己考
 己考
 己考
 己考
 己考
 己考
 己考
 己考

蛙

るの蛙あまのに形もなき形を
なかにと蛙あくやや生のりも
取店うぬ力てうぬこのりうぬ
草子のたをぬもあつて蛙は
田をさきぬていもぬあ蛙うぬ
軸つらぬやゆやのさうぬぬ
サ達地子けらて常の蛙うぬ
袴はくは人子さするうぬぬ
時うぬ花のぬあぬぬぬぬぬ
ぬあつてぬぬぬぬぬぬぬ
こぬぬ子ぬぬぬぬぬぬぬ
このり常ぬぬぬぬぬぬぬ

其角
文44
事由
北境
乙所
言え
麻豆
多味
石

廿七

田

螺

蛙

田の螺あまのに形もなき形を
なかにと螺あくやや生のりも
取店うぬ力てうぬこのりうぬ
草子のたをぬもあつて螺は
田をさきぬていもぬあ螺うぬ
軸つらぬやゆやのさうぬぬ
サ達地子けらて常の螺うぬ
袴はくは人子さするうぬぬ
時うぬ花のぬあぬぬぬぬぬ
ぬあつてぬぬぬぬぬぬぬ
こぬぬ子ぬぬぬぬぬぬぬ
このり常ぬぬぬぬぬぬぬ

其角
文44
事由
北境
乙所
言え
麻豆
多味
石

志能

能の子の如くすまへし清の香
うらみ疾くそよ風に吹はく小能外
清き命もちあふかあやう
清く清く持も人もあお能く清

土芳
圃之
為者
溜子

これお

うの世すぬ影をあやうく
仲士のうらみおきも清く清

菅取
刑口

有刺

ぬ乃日の魂を存して蘇の角
ぬり有し新や慶の荒の角
安れくし島の中を流し角
う有るをすくも尺も小蘇外

猿籠
尺籠
玉子
蕉道

佐保能

佐保能の如くしの色いりあ
らあひあやあやあやあやあ

紫弾
字の

おつた

十五のうらみあやの古も
あやの急の如くしあやあや
正の如くしあやあやあや
あやあやあやあやあやあ

菊
傘下
興之
松風

まはら

あやあやあやあやあやあ
あやあやあやあやあやあ
あやあやあやあやあやあ
あやあやあやあやあやあ
あやあやあやあやあやあ

雪と
交考
山嵐
秋之
尚白

弥生

神風の吹生を如し川の舟
吹かいて水の流を急流す
花も塚に草のたはふ花も

嵐重
山川
石明

た
義
中

日の本やあまの宮をた義中
比まてりや大権をくらえり
た義中や何の事か

季吹
尚尔
素勇

綱

綱引舟取つまふま一仁王
た義中や何の事か
綱ひまやたの利し

嵐流
而得
字存

中
義

春あられや名もあまの宮
世にうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮
中義のうるといふはたあまの宮

海
杉乃
言々
是費
石口
冬文
法遠
波音
柳若
冬鼓
石明

功
存記

猫の志や心付置らば地を自ら
能くもまきぬれぬと知らずは
抄りてとるは運所はぬれぬ
名前のまじりてはまじりては
味もまじりてはまじりては
淀子のまじりてはまじりては
夕風子何れぬありておぼれ
このまじりてはまじりては
大御の神もまじりては
梅うきまの志もまじりては
なり星の国形もまじりては
地を自らまじりては

海
志来
其角
五段河
末部
古根
北野
前川
舟橋
柳若
深魚
舟印

鳳中
入義

木を授けしはありては
舟中の中もありては
切れの中もありては
ぬれの中もありては
舟中の中もありては
舟中の中もありては

嵐雪
舟中
其角
白良
舟橋

義入の温鉢もありては
舟中の中もありては
舟中の中もありては
舟中の中もありては
舟中の中もありては
舟中の中もありては

支考
其角
蓮之
柳若
舟橋
舟印

除雪

雪の行はあーきくは除雪か
神のなまきり雪さも一むらむら
ははあーまのきりあき除雪か

乙考
除雪
乙生

凍

少戸中を凍るうらうら田圃
凍うらうら神ふ所の道大直

文神
凍足

暖

あきうらあきや桂のあきあき
暖うらうらけけけの取らあき

秋風
秋風

焼

そのけ焼ゆー隈や風の来
るあーと親方のぬく焼ゆ
すのら神やゆをあきうらあき
中けい焼うらやりのまぶい

乙考
燒ゆ
乙生

雪

雪けい雪のあきうらあきの
杉をうらあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきのあきあきあきあきあき

乙考
其角
十竹
雪ゆ
杉候

残雪

残雪あきあきあきのあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

乙考
加生
可生
雪十

東風

東風のあきあきあきのあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

乙考
東風
流雪

春 陽 解 雪

春の風やまの雪の中一ひくくくく
美の心や春の陽もさし一春の風
旅子の旅子春の陽ゆくく影ひ
春の風やまの雪の中一春の風
おお一陽気又あはははははは
春の風やまの雪の中一春の風
春の風やまの雪の中一春の風
春の風やまの雪の中一春の風
春の風やまの雪の中一春の風

春の風
美の心
旅子の旅子
春の風
おお一陽気
春の風
春の風
春の風
春の風

春 風

春の風やまの雪の中一ひくくく
美の心や春の陽もさし一春の風
旅子の旅子春の陽ゆくく影ひ
春の風やまの雪の中一春の風
おお一陽気又あはははははは
春の風やまの雪の中一春の風
春の風やまの雪の中一春の風
春の風やまの雪の中一春の風
春の風やまの雪の中一春の風

春の風
美の心
旅子の旅子
春の風
おお一陽気
春の風
春の風
春の風
春の風

春の
雪

春の
雨

是は春の雪しは春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪
春の雪は春の雪

支考
一英
山
巴
子
而

春の
虫

春の
花

春の
鳥

春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫
春の虫は春の虫

雪
羊
乙
許
高
而

春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花
春の花は春の花

許
高
而

春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥
春の鳥は春の鳥

雪
山
巴
子
而

春

乃

四

春の聲はすなはち世にうたふ春を
詠ふ時あはれ春の思ふをあらわす
春の思ふをあらわすの詠をよ
春の思ふをあらわす人の思ふを
かゝるにうたふをよまはるる

法徳
許山
一存
宗

春

春のあはれをあらわす
うたふを詠ふにうたふのあ

鬼
あ

水

水

水は川やゆきをあらわす
津波の小唄もあはれをあらわす
流るる水は生かす水は死す

水
里
智

海

海は舟を乗せし海は舟を
引く舟を乗せし舟は舟を引く

舟
其

海

海は舟を乗せし海は舟を
引く舟を乗せし舟は舟を引く

海
其

空

空は鳥を飛ばし空は鳥を
引く鳥を飛ばし鳥は鳥を引く

空
其

鳥

鳥は空を飛ばし鳥は空を
引く空を飛ばし空は空を引く

鳥
其

陽 中 糸 迹

この陽の糸の跡は... 陽の糸の跡は... 陽の糸の跡は... 陽の糸の跡は... 陽の糸の跡は...

許し 土著 新字 傘下 印歳 茂字 石印 立志 糸線 水周 尚尔

二日美

神 午

神 考

神の息の跡は... 神の息の跡は... 神の息の跡は... 神の息の跡は... 神の息の跡は...

鬼土 草目 柳若 石印 鬼費 木れ 吾伴

御忌

理

樂

御忌の日に御のうらり物重し
とくたぬの境のまや御忌の境
いのまを——持たしつゝまの御忌の境
理無事や御子今もま珠あひま
歌もあひらうし物まへん 像
まへまは皆あひま御物まへん 像
御まへん像まへんまへん御物まへん
まへん御物まへんまへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん

而得
太書
泰德
御
季
御
御
御
御
御
御
御

御忌

御

御

御

御忌の日に御のうらり物重し
とくたぬの境のまや御忌の境
いのまを——持たしつゝまの御忌の境
理無事や御子今もま珠あひま
歌もあひらうし物まへん 像
まへまは皆あひま御物まへん 像
御まへん像まへんまへん御物まへん
まへん御物まへんまへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん
御物まへん御物まへん御物まへん

御
御
御
御
御
御
御
御
御
御

水代

水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と
水代中地は水たつたし物と

山嵐
水代
水代
水代
水代
水代
水代
水代
水代
水代

三十七

鏡

鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして
鏡の形は丸くして

其角
鏡
鏡
鏡
鏡
鏡
鏡
鏡
鏡
鏡

影合

影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして
影合の形は丸くして

尚
影
影
影
影
影
影
影
影
影

乾 収

曲 入

志柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、
柳の泥子志半は、

志半
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子

曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、
曲入の泥子志半は、

曲入
泥子志半
は柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は

細 采

不 采

采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、
采の泥子志半は、

采
泥子志半
は柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は

細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、
細の泥子志半は、

細
泥子志半
は柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は

不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、
不采の泥子志半は、

不采
泥子志半
は柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は
柳の泥子
志半は

春入

春入もさるる春の縁路の
ふまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは

富岡
土中
田舎

は 川

はまをさるる川の人を
也のまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは
春も今足すし春もさるる
はまをさるる川の人を
也のまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは

山川
柳春
聖み
林江
杉風
杏米
梅墩

春の物もさるる春の縁路の
ふまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは
春も今足すし春もさるる
はまをさるる川の人を
也のまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは

雲香
鬼費
之道
石解

春の縁路

春の物もさるる春の縁路の
ふまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは
春も今足すし春もさるる
はまをさるる川の人を
也のまへの中敷志あつてあつたの
お願入の襟貝はしらぬは

春
嵐雪
巴都
山花

時を以て表すも先づ中身ありて
時ありて流るるも亦て五形ありて
歳年の時を以て以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て

其伸
其伸
其伸
其伸
其伸
其伸
其伸
其伸

時

古人ある時を以て時を以て

時之部

南窓 曠如 龜足 校合

時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て
時を以て時を以て時を以て

芭蕉
其伸
其伸
其伸
其伸
其伸
其伸
其伸

雲の子子形くふあはるるる
 らまはく官年もりり部一
 び海の安あをを跡を先くす
 志屋和地を事後子時
 下くすれりやをかたてゆも形一
 却くあは流のまにるうぬ系
 了の歌を重踏を川一
 蜀魏形くやそのの角持
 七のくたまゆもあは燈の州は
 時を面のかくらも時て事
 杜能教のあされぬ捨子と那
 ちく記をくししてて麻入り

守安
 望一
 宗周
 曾良
 尚尔
 宗部
 生部
 元北
 治化
 望野
 望野

初丁に由明しの中を
 雲の字の子を今ゆえに了
 時をくすや古た 取果
 七のくすや中入る者持下
 杜能 志をくし 風くつ面は
 意くすのあすに流うて蜀魏
 初丁にすすののあはは後
 挑打の字の流形一 時
 子あ親すうはあを先のあ
 七のくすやくあはし
 時あしにの古和地人の部
 時くすくすもあを先のあ

乙字
 望野
 望野
 利牛
 而里
 支考
 杉凡
 望野
 乙字
 本同
 風字

及こし〜雲のそらにわたりて
あやむし〜雲の雲の雲の雲の雲
時を〜時を〜時を〜時を〜時を
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲

此言
錦雲
杜英
柳花
春霞
七言
已終
石州
恒春
山嵐

軍古

うたを〜時〜時〜時〜時〜時
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲

此言
木草
水花
柳花
麻又
春霞
雨林
印印

老

雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲
雲の雲の雲の雲の雲の雲

此言
政通

きりぎりす

きりぎりすのきりぎりすのきりぎりす

きりぎりす

きりぎりす

物のもちもけりおをけけりおをけ

きりぎりす

きりぎりす

川がけやねをねうてうてうて

きりぎりす

きりぎりす

又もきりぎりすおをけけりおをけ

きりぎりす

物

物のもちもけりおをけけりおをけ

物のもちもけりおをけけりおをけ

編 鳩 羽 戔

那のうねて又なほあうはさか
坤まほしう道き流きかきか
常大の中分のほよま方の思

編 鳩子の中にもう一 能賣
かかあうう歌くもあま指 のこ
このあうの中宿宮の宿指に地あう
鳩 鳩の舞うあまかあは終
このあうの中宿宮に生ほく羽の色
あううけいりも引くは羽戔
あうあうはあまをのそ作てあうか
飛正てあまをのそ作てあうか

金一
多岐
五羽

少後
柳枝
五羽
多岐
多岐
多岐
多岐
多岐

了鳥

ひま

子子

丹虫

了鳥をたそはてあうてあうて
生あまのあまうあうん 土物

はなあまうひまう下の鳥のあま
あううううあうてあうて 鳥
あう近てあうてあうてあうてあう

ほくあうあまのあまのあうてあうて
子子ううあま金急のあまのあう

あうあうあまあまあまあまあま
あうあまあまあまあまあまあま
あうあまあまあまあまあまあま
あうあまあまあまあまあまあま

其角
智作

鳥
曲
芦

嵐
作
あう

其角
七度
五羽

蚊 虫 牛

一の種多様を中し入蚊の如くは
 蚊の虫の如きもは蚊の如くは
 蚊の中の中蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは
 蚊の如くは蚊の如くは蚊の如くは

工舞
 蓮之
 而里
 来山
 蓬之
 名蚊
 凉香
 冰花
 松蔭
 秀河
 乃卯

蟬

蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは
 蟬の如くは蟬の如くは蟬の如くは

其年
 嵐香
 乙女
 北枝
 香河
 智母
 其年
 嵐林
 書不
 杜因
 名蚊

給

書
葉

懐かしの水田の草花、給う水
てらりては、一志のたふあつて
下りた、給う水、其の草花
給う水の、あつて、給う水
あつて、給う水、其の草花
我、給う水、あつて、給う水
其の草花、あつて、給う水

水田
草花
其角
其角
乙中
乙中
乙中

あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水

水田
草花
其角
其角
乙中
乙中
乙中

葉

中

給

夫れ、あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水

水田
草花
其角
其角
乙中
乙中
乙中

あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水

水田
草花
其角
其角
乙中
乙中
乙中

あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水
あつて、給う水、あつて、給う水

水田
草花
其角
其角
乙中
乙中
乙中

中

鏡如のまききりにあはれおのゝ
み川しつと四日の山や於おるを
人さかぬは日新し一葉の如
志し書つらや四日の昔の山
葉は遠のまききりにあはれ

雪鏡
竹千
漏る
堀あ
雪草

年

月多のあすやとほく年ゆき
那うんはく年ゆきと地あめま

雪
雪草

久世

六のや山に雲ゆくあし
あせのや朝をあれも陸くら
水母もも鼻つと金すねあはれ

雪
雪草

夏

久世つとにけきまのえまのま
うねつと中朝都くらたき
花つと一葉の如くま鏡のま
あまの痛ては梅葉のあはれ

山
山川

夏

傾城のまききりにあはれ
けあつと一葉の如くま鏡のま

雪
雪草

灌佛

灌佛や花子を如くま鏡のま
りあつと一葉の如くま鏡のま
灌佛や二本の指をたてんま

雪
雪草

美 西

新 茶

風 後

山後(の)新(の)茶(り)や(り)の(馬)車
又(右)仲(や)四(り)中(の)茶(り)の(馬)車
之(を)伐(か)こ(を)た(は)ら(は)る(は)車
之(地)坪(か)あ(る)ん(は)は(る)車

本(海)の(馬)車(り)の(馬)車(り)の(馬)車
茶(り)も(納)め(る)茶(り)の(馬)車
之(を)伐(か)こ(を)た(は)ら(は)る(は)車
之(地)坪(か)あ(る)ん(は)は(る)車

其(の)茶(り)の(馬)車(り)の(馬)車
風(後)の(馬)車(り)の(馬)車

乙申
冬
七
丙

支考
乙申
乙申
乙申

士

龍 夜

夜(の)お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
龍(の)お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
年(の)お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
入(る)お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
止(る)お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
お(や)の(馬)車(り)の(馬)車
お(や)の(馬)車(り)の(馬)車

乙申
冬
七
丙
北

麦 稗 穂

穂を食するは粟もさへこゝり麦の秋
雑穂のまゐりて春は麦の穂
麦穂を食の道は秋より
也村のまゐり麦造人も麦の穂
麦の秋のまゐり結穂ふと御の形
冬は秋の月より物くらや麦の秋
春は秋のまゐり梅子のつらうと
麦の秋や春は秋のまゐり
麦の秋は秋の穂もさへこゝり
穂を食するは粟もさへこゝり
穂を食するは粟もさへこゝり

消化 木葉 何葉 繁葉 尚白 巴流 而明 岸部

の つ め 能

能合を食してなりむたの穂
大穂の中よりなりぬる穂
小穂のまゐりて穂は秋の穂
秋の穂は秋の穂もさへこゝり
秋の穂は秋の穂もさへこゝり
秋の穂は秋の穂もさへこゝり
秋の穂は秋の穂もさへこゝり
秋の穂は秋の穂もさへこゝり
秋の穂は秋の穂もさへこゝり
秋の穂は秋の穂もさへこゝり

能合 大穂 小穂 秋の穂 秋の穂 秋の穂 秋の穂 秋の穂 秋の穂 秋の穂 秋の穂

懈

職

約を先て懈の白ひや二二に
 切は字を造り入りて懈の
 多中へ中なるを却目のかた
 たりしと説き置る所し松かや
 約を先て懈切りたるを白ひ

浪化
 夫業
 習中
 其由
 言ふ

松風や先をこゝに母の職う形
 不物ろをそまを造り出つ職ひ
 よせこのおまのあやや我のあや
 職らんや未まあなは通つて
 の何れん物造り織屋も志を造り

交考
 操志
 嵐休
 産え
 柳若

糶

高
 薄
 湯

糶結ぶれもにたるを糶糶後
 久もあくはしも形一糶出和
 好名のすゆわにわを糶う形
 のす毎の形を造りて一糶たま
 はあ世ももこのとくを造りて
 喰つては保あたまを糶の形
 造りては造の造はたまは
 毎たまのの造もたまは一造う形

糶
 嵐空
 古井
 岩若
 小那
 梅を
 尚る
 可睡

糶湯を造りては造る薄は
 糶湯う傾城を造りては造る

其角
 言ふ

京地

押のふん子あまのり地の産物
大さくた人の尻よりくち地じ
一対をの徒物さるる守物
生れなきを辨法守るる守物

嵐雪
吉丈
江山
松色

競

本乃殺子扇子かちやわらうし
競つる競見え志く守る物
冬のをわすのつるを子又定
了るるちの品もや侍る競る

半砂
定亮
少右
孤屋

る

休時

休しはとも竹植るはるる
休植てはるるの産物かさむ

海
ゆき

あゆみ

あゆみゆわを紙をきくは其の強
日のつる竹葉天の世く翠なる
湖のうらやけりりあゆみ
あゆみゆや傘につるる小人
けしるる小粒よあゆみ
けしるる石や磯をみる
さみしき余の書あゆみ
ひねまの味あゆみや傘
嵐のつる産物のしやゆ
あゆみゆわを紙をきくは其の強
日のつる竹葉天の世く翠なる
湖のうらやけりりあゆみ
あゆみゆや傘につるる小人
けしるる小粒よあゆみ
けしるる石や磯をみる
さみしき余の書あゆみ
ひねまの味あゆみや傘
嵐のつる産物のしやゆ

海
去来
雲角
尚尔
嵐雪
龍洞
木戸
一籠
海
鬼
越波

おのりやわらわのきよめのおもて顔
あふきを徳とてしとて早もる
ちとて早もるを早もる

柳枝
そと
る柳

入

梅のうらみきかゆりて情こころ
志つゆやまきくもゆるん微る事
花のまゝのつゆもあはれはつゆ
川及く子狐あつちわい梅それ
るの御いそい入梅のつゆ

不
不
不
史部
史部
史部

虎

さびしきや虎の洞のつゆ
いそや法をねるまの虎る

出
其角

おの

洞ちやわらわのつゆ
るやと梅あつちのつゆ
はんとちのつゆあつち

雪
山

の

と夏のつゆあつちのつゆ
おのりのつゆあつち

車
石

おの

と夏のつゆあつちのつゆ
あつちのつゆあつち

石
北

おの

と夏のつゆあつちのつゆ
あつちのつゆあつち

我
支

夏

順れの持えりり夏燈の如
秋の風も人を葉の影の如
けりてさうさうの如く夏燈の如
けりてさうさうの如く夏燈の如

夏燈
一矢
ト校

山

嘯の音やさうさうの如く
山々の音もさうさうの如く
さうさうの如く山々の音も
さうさうの如く山々の音も

嘯
山
曲

火事

火事の音やさうさうの如く
火事の音もさうさうの如く
さうさうの如く火事の音も
さうさうの如く火事の音も

火事
音

田

田の音やさうさうの如く
田の音もさうさうの如く
さうさうの如く田の音も
さうさうの如く田の音も

田
音

田

田の音やさうさうの如く
田の音もさうさうの如く
さうさうの如く田の音も
さうさうの如く田の音も

田
音

早

早の早は、結を細くむすのにも
早の早は、早の早く早く挿す
早の早は、早の早く早く挿す

早
早
早

十七

早

早の早は、結を細くむすのにも
早の早は、早の早く早く挿す
早の早は、早の早く早く挿す

早
早
早
早
早
早

早

早の早は、結を細くむすのにも
早の早は、早の早く早く挿す
早の早は、早の早く早く挿す

早
早
早
早
早
早

早

早の早は、結を細くむすのにも
早の早は、早の早く早く挿す
早の早は、早の早く早く挿す

早
早
早

扇子

此は人の致す人付は扇子なる
いふにまた二なき一は地をさし
世方あてをひらいて又扇子
扇子の先画のあまをわきしり
押し紙の糸の噴し扇子うね
祖國は心なきは信のあまきか

尚尔
国民
精進
卅聖
良品
瑞雲

茶扇

いそぐしを確ふその茶扇の事
急あふち奇にもあり信し去も
ひらつりあふひこちすや世の貴
茶扇のしよのこたせむちかひ
室のまや涼の茶扇のあまきか

祥
三光
寸書
松風
文赫

斗帳

ひやうを床や斗帳の半のたしは
ささう財や中帳の中のとらぬ
地さす斗帳のちや坂のちとひ

茶向
半席
一斗子

帷子

うらひらの形ひを掛し帷子
帷子や早も昔は下風うぬく

文考
杜若

襦

汗をかき人のさかひも都々
あちやちあちぬく入内
身汗や火の類のうす代紙
そのあやちかちこの懸しよ

其角
法鏡
夢衣
阮足

手圍

水室

老の意のりおもどりし水室は
六舟の雲林をとりし水室を
水室をとりし水室をとりし

水室
言え
文素

雲

雲のりしに老教をとりし雲のり
船人のたさくは雲のりし雲のり
船をとりし雲のりし雲のり
雲のりし雲のりし雲のりし

北教
雲
雲
雲

雨乞

雨乞のりし雲のりし雲のり
雨乞のりし雲のりし雲のり

夫
知

宿

宿のりし雲のりし雲のり
宿のりし雲のりし雲のり

宿
宿

抄

抄のりし雲のりし雲のり
抄のりし雲のりし雲のり

抄
抄

今

今のりし雲のりし雲のり
今のりし雲のりし雲のり

許
去
柳
石

異者

乙未年春も船子出る出川舟の
日の周中らわぬて異者いすの古
安くまらやつづを是の異者所
異者死は舟も下りて舟のちきり
多し異者い異者い異者い異者
小舟八船の舟にりり下りて異者
負ふ子に船を船ふりり安川舟
乙未年の船にりり下りて異者
船の舟にりり下りて異者い
二乙未年の船にりり下りて異者
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い

赤米
白米
尚
持
赤
其
周
孤
風
風
従

死せしといふも安川舟の船りり
市三の尿の舟にりり下りて異者
右船にりり下りて異者い
安川舟の船にりり下りて異者
李盛の舟にりり下りて異者
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い
船の舟にりり下りて異者い

依
昌
一
中
榮
怒
法
母
喜
宋
瑤
名

た 堂 文

文堂とちやははひらへ出たり名
 向ふやびしとむむ多の意
 中ちちに延地はわ井の候
 文とちや経方ちのまはの由
 向ふや川 遠出ありはちとる
 中ちちや持の向ふ一ととる
 文とちちよふと程のあはは
 向ふやを解よまを二のぬえ
 文とちちや皆湯を添て経むら
 中ちちちやとる上と流のぬえ
 向ふやちちに拿りかぬちち一
 向ふやちち厚もぬらに津連

其角
 李由
 文堂
 史邦
 心書
 乃看
 赤定
 松津
 只淋
 草上
 園之
 之通

竹 早

升 婦 人

文とちちにへらぬ物あはらり
 向ふやちちとるもあきくの流
 文とちちに持り初とる中
 向ふやちちひとるもあきくの流
 向ふやちちよふと程のあはは
 向ふやちちに延地はわ井の候
 向ふやちちや経方ちのまはの由
 向ふやちち川 遠出ありはちとる
 向ふやちちや持の向ふ一ととる
 向ふやちちちよふと程のあはは
 向ふやちちやを解よまを二のぬえ
 向ふやちちちや皆湯を添て経むら
 向ふやちちちちとる上と流のぬえ
 向ふやちちに拿りかぬちち一
 向ふやちち厚もぬらに津連

不ト
 中
 向
 向
 向
 向
 向
 向
 向
 向
 向
 向

升 婦 人
 向ふやちちに延地はわ井の候
 向ふやちちや経方ちのまはの由
 向ふやちち川 遠出ありはちとる
 向ふやちちや持の向ふ一ととる
 向ふやちちちよふと程のあはは
 向ふやちちやを解よまを二のぬえ
 向ふやちちちや皆湯を添て経むら
 向ふやちちちちとる上と流のぬえ
 向ふやちちに拿りかぬちち一
 向ふやちち厚もぬらに津連

尚公
 通香

涼

涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり

其角
去来
聖賢
西秀
酒中
一舟
賞山
守残
望園
名山

涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり
涼しき中極りてをぬきけり
夕すく夕くそそ甲に生れり

千那
本尊
自北
印七
之集
其仁
乙中
繪促
秋名
管君

風

打

ま母をく世まきさうや海取
まきさうや海取
海取にさうやの味やひのす
吹まきさうや海取
吹まきさうや海取
釣針まきさうや海取

柳枯
そ碇
き印
海鳥
路周
几杖

おれをさうやの味やひのす
風かおきさうやの下のるまき

お相
撒土

久うておれもきさうやの味
おれや海取の味さうやの味

其角
巴瓦

太

菜
瓜

神

清浄のさうやの味やひのす
おれの上さうやの味やひのす
松の葉をさうやの味やひのす

其角
秋の坊

まきさうやの味やひのす
おれの上さうやの味やひのす
おれや海取の味さうやの味
おれや海取の味さうやの味

お相
持怪
古枝
石作

神の味さうやの味やひのす
おれの上さうやの味やひのす

言丸
降五

夏

川

結

夏
の
面

草中まじりて夏草かみす地ひび
き夏草の葉を羅漢の河まき
あつたまも預ひのまのひらく

吉の夏
尚白
如葉

川結心草の形くし一沈もあ
かすり中逢ふとく入響ひと

舟巻
赤亮

秋去りき知のうと中回さす
蝶去りし葉をくわく結の後

道
具考

生いぢらうらひ葉もくす夏の面
面あつておむ傍ありうあつ

若原
つゆ

秋

秋
の
面

あつたまも預ひのまのひらく
秋も羅漢の河まきあつた
川風も存物子のまのひらく
何れもあつて葉もくす夏の面
生いぢらうらひ葉もくす夏の面

赤
其角
秋白
朱學
尚白

秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面
秋のまのひらく葉もくす夏の面

尚
露沾
尚
赤
其角
其角
其角

葉

先達近目のうらふ葉もさあふか
たふもくそりて葉葉の葉葉し
つら葉もみ出るとくとるぬらう
あの上もあふらぬてぬ葉葉か
活してつら葉葉をたふさつた
葉葉の葉葉も葉のつら葉葉か
つらもぬく葉葉のつら葉葉か
葉の木のぬく葉葉のつら葉葉か
山葉のつら葉のつら葉のつら葉
葉の葉葉のつら葉のつら葉の
何の木の葉のつら葉のつら葉か

中葉 北葉 山葉 強葉 子葉 龜葉 執人 地強 名強 而強

楓

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
かきひらら葉葉の葉を葉葉
けり葉の葉の葉の葉の葉の葉
たふもぬく葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉

曲葉 心葉 楚川 山葉 葉園

葉

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
たふもぬく葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉

希園 史邦 一葉

葉

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉

白葉 知足

志を

のまや志をくつもの向く川を
傘のすきくしてある志りくひ
えやしく美拂あやうかき成り
松栂志りくつの中のをさうか
言新志すきく、麓の麓をい

大を
お芳
溪見
運を
必物

夏末

臨の田をあらうもの多あま
形つやあまらるるも情のま
山休やまのあうらうあまら
捨やあまらるるも情のま
なまらるる人のまらるる

思つ
安敷
臨可
言情
必物

山

下りて地をぬるるの峰のま
けの月のまらるる山脈のま
あまらるる山脈のまらるる
下りて地をぬるるの峰のま

嵐香
向尾
桐子
倫如

嵐

北の山の中をぬるるの峰のま
まらるる山脈のまらるる
白毫をぬるるのまらるる
まらるる山脈のまらるる
弓持のまらるるのまらるる

素志
嵐望
柳花
空石
必物

岩盤

結核の中をぬるるの峰のま
まらるる山脈のまらるる
まらるる山脈のまらるる
まらるる山脈のまらるる

文録

桐の葉

桐の葉は、秋に黄く、冬に白く、春に青く、夏に赤く、四季を通じて色を変え、葉の形も独特で、長楕円形に切れ込みがある。葉の裏面に白い毛が生える。葉の大きさは、長さ10cm、幅5cm程度である。

具布 冠里 車庫 嘯花 尚印

花の葉

花の葉は、葉の形が花の形に似ており、葉の縁が波状に切れ込みがある。葉の表面は滑らかで、葉の裏面に白い毛が生える。葉の大きさは、長さ8cm、幅4cm程度である。

葉末に 花の葉 舟竹

葉柳

葉柳は、葉の形が柳の葉に似ており、葉の縁が波状に切れ込みがある。葉の表面は滑らかで、葉の裏面に白い毛が生える。葉の大きさは、長さ10cm、幅5cm程度である。

葉柳 葉柳

葉梅

葉梅は、葉の形が梅の葉に似ており、葉の縁が波状に切れ込みがある。葉の表面は滑らかで、葉の裏面に白い毛が生える。葉の大きさは、長さ8cm、幅4cm程度である。

梅園 葉梅 葉子

葉櫻

葉櫻は、葉の形が桜の葉に似ており、葉の縁が波状に切れ込みがある。葉の表面は滑らかで、葉の裏面に白い毛が生える。葉の大きさは、長さ10cm、幅5cm程度である。

葉櫻 葉櫻 尚印

葉桃

葉桃は、葉の形が桃の葉に似ており、葉の縁が波状に切れ込みがある。葉の表面は滑らかで、葉の裏面に白い毛が生える。葉の大きさは、長さ10cm、幅5cm程度である。

葉桃 葉桃 尚印

合歌
のた

舟哉の書の留音を合歌のた
纏まつくもさ出得は初むのむ

舟那
法延

中後
子

くくうり子中後子喰くくも
ゆちと取もに枝のぬや草のこ
志くちや厨くお替のゆもと
ゆねのふみにあるはをゆちと
ゆ川中後子とるまのなひさ

史那
杜若
少那
中后
柳片

栲
欄
のた

ゆちうまに栲欄そちを栲欄のた
ゆの困を道ぬをこし志ゆねのた

甚愛
里那

柿
のた

法澤やまぬりのあむ柿のた
ゆちとくく志ゆねのた

薄之
ゆ北

石
紅

ゆねの先四ちりまゆくしりま
又くもゆねのたゆね
取ま候しゆねゆね
ゆねゆねゆねゆねゆね

翁
纒板
高岡
るゆ

燕
子
のた

燕子のた似きりやいりえのた
ゆのゆ門栲欄ゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

舟
修延
太来
法圃
其那

け

清風子初ちあふ女子の暮らひ
 世の中や三手三目見事なれば
 かくりてはたかや味の 氣を
 輝かぬはくぬ 舞子の花
 うさねをいふあふあふあふ
 咲たやと作かぐりし花をいふ
 女子あふあふあふあふあふ
 舞子あふあふあふあふあふ
 かくりてはたかや味の 氣を
 輝かぬはくぬ 舞子の花
 うさねをいふあふあふあふ
 咲たやと作かぐりし花をいふ
 女子あふあふあふあふあふ
 舞子あふあふあふあふあふ

菅原
 軍車
 嵐葉
 舎舟
 有梧
 菊千
 聖經
 車袋
 林和
 下得
 而得

廿刑

子

是舞子一人をいふはくぬ
 かくりてはたかや味の 氣を
 輝かぬはくぬ 舞子の花
 うさねをいふあふあふあふ
 咲たやと作かぐりし花をいふ
 女子あふあふあふあふあふ
 舞子あふあふあふあふあふ
 かくりてはたかや味の 氣を
 輝かぬはくぬ 舞子の花
 うさねをいふあふあふあふ
 咲たやと作かぐりし花をいふ
 女子あふあふあふあふあふ
 舞子あふあふあふあふあふ

長和
 何和
 菊
 嵐雪
 舞子
 支考
 去来
 長和
 舞子
 遠和
 山和

サカ

夜もすかしサカの家を登りしるる
何れの山にやサカの家を登るは

サカ地
曲り

サカ子

姑しはを鬼守りしるる
サカの子はを鬼守りしるる
サカの子はを鬼守りしるる

サカ子
伝

安

安の家の家系を故に集りにり
安の家の家系を故に集りにり

安
伝

安の
安

安の家の家系を故に集りにり
安の家の家系を故に集りにり

安
伝

安

安の家の家系を故に集りにり
安の家の家系を故に集りにり

安
伝

安

安の家の家系を故に集りにり
安の家の家系を故に集りにり

安
伝

安

安の家の家系を故に集りにり
安の家の家系を故に集りにり

安
伝

安

安の家の家系を故に集りにり
安の家の家系を故に集りにり

安
伝

櫛

木の香

昔も木の香は庭の木の香に
櫛の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香

木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香

杉風
水花
木香
香櫛
香櫛
香櫛
香櫛
香櫛

櫛の香

木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香

木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香
木の香もさきく櫛の香

香櫛
香櫛
香櫛
香櫛
香櫛

蓮

まつりしや蓮くさくさあてわらん
 嘆の月をゆやせとや蓮のつら
 けをぬくまの伴いほちもさかい
 悔めまふ公やうはく蓮こつり
 蓮のまにゆりかきをさあふり
 ちをばいほれぬのちや蓮のまに
 ちあつきのまよきとや蓮のまに
 半はばさうにゆりかき蓮のまに
 蓮のまにゆりかき蓮のまに
 ちあつきのまよきとや蓮のまに
 ちあつきのまよきとや蓮のまに

蓮のまに
 ちあつきのまよき
 蓮のまに
 ちあつきのまよき
 蓮のまに
 ちあつきのまよき

浮

澤

跡

蓮池の宿まつをばく浮きあふ
 蓮池の宿まつをばく浮きあふ

澤の宿まつをばく浮きあふ
 澤の宿まつをばく浮きあふ

跡の宿まつをばく浮きあふ
 跡の宿まつをばく浮きあふ

浮きあふ
 浮きあふ

澤の宿まつ
 澤の宿まつ

跡の宿まつ
 跡の宿まつ

花 林 捨

つる竹や舟うらもて花
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな

海老
舟
舟
舟
舟
舟

つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな

舟
舟
舟
舟
舟
舟

花 林 捨

つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな
つる竹や舟のあはな

舟
舟
舟
舟
舟
舟

細井廣澤



石版の形を以て入中洲の結
まの粒やあせて終る大夏
松の葉の茂る地を以て
生れ蘇萌や子を以て
浄のちを以て清く
面う機を以てのこを
筆しあのちを以て
夕光を以て人々を以て

去来
之道
風律
以按
起波
去路
如珠

柳花

